ドイツ語形容詞語形変化の初学者に対する指導

Teaching German Adjective Declension to Beginners

片岡宜行（人文学部准教授）

１．はじめに

名詞句等の性・数・格による語形変化は、動詞の人称変化と並んで初級ドイツ語で学ぶ文法事項の中で最も基本的なものである。学習者はこれらの語形変化を学ぶことで、構造を持ち一つのまとまった意味を表す文を理解することができるようになる。一方で、名詞句の語形変化は学習者にとって非常に複雑に感じられるものであり、これがドイツ語に対する苦手意識の原因となることも十分にありうる。ドイツ語の運用力を着実に身につけ、学習へのモチベーションを保つうえでも、名詞句の語形変化を確実に定着させられるように指導することは極めて重要である。さらに、授業での指導や学習にあてられる時間に制約があることも考慮に入れるなら、可能な限り効率的な学習法を追求する必要性は高いといえよう。また、学習を容易にするだけでなく、現代ドイツ語の特性に合致した指導法を採用することにより、学習者の言語への理解を深めることも期待できる。

本稿で考察の対象とするのは名詞に付加される形容詞の語形変化である。付加語形容詞は強・弱二種類の語尾を持ち、現れる環境によってこれらを使い分ける必要があるので、学習者にとっては語形変化の習得が困難である。筆者はすでに付加語形容詞を含む名詞句の語形変化の指導法について論じたことがあるが、(1) 具体的な導入の手順や方法については十分に述べることができなかった。本稿ではこの点を補い、指導法や教材の作成について考える上での端緒としたい。

以下、２では格の序列関係に基づいた名詞句語形変化の導入法について述べる。定冠詞や不定冠詞などの付された名詞句の語形変化を学ぶ際、１格から４格を一度に導入するのではなく、序列の順に段階的に教える方法が有効であると考えられる。次に、３では付加語形容詞の語尾選択の規則について確認したうえで、実際の指導法について検討する。

２．名詞句語形変化の指導法

定冠詞を「１格＞４格＞３格＞２格」という格の序列関係に従って配列した場合、語形変化

表は次のようになる。[2] なお、性・数については男性・中性と女性・複数が隣接するように配列している。

表１　定冠詞の語形変化

<table>
<tr><td></td><td>男性</td><td>中性</td><td>女性</td><td>複数</td></tr>
<tr><td>１格</td><td>der</td><td rowspan="2">das</td><td colspan="2" rowspan="2">die</td></tr>
<tr><td>４格</td><td>den</td></tr>
<tr><td>３格</td><td colspan="2">dem</td><td rowspan="2">der</td><td>den</td></tr>
<tr><td>２格</td><td colspan="2">des</td><td></td></tr>
</table>

伝統的な配列の方法では、格は１格から４格へと順に並べられ、性については男性・女性・中性の順序が採用される。表１のように並べることで、伝統的な配列では複雑に思える語形変化を見やすくまとめることができ、この表を４つの部分に分けられることが明確になる。格についていえば、１格・４格は男性を除いて形態が一致し、３格・２格の形態はこれとは際立った違いを示す。また性・数については、男性・中性と女性・複数それぞれの語形変化に類似性が見られる。表１のような配列を採用することで、このような関係がとらえやすくなるのである。[3] また、表１の配列の仕方は学習者に名詞句の語形変化をわかりやすく示すものであると同時に、現代ドイツ語における格の体系のあり方を反映したものであるということができる。次に、この格の序列関係を支持する根拠について見ておきたい。

ドイツ語の４つの格の間に「１格＞４格＞３格＞２格」という序列関係が存在することは広く認められており、１格・４格と３格・２格の間には出現の頻度や用法の面で大きな隔たりがあることから、１格・４格は無標の、３格・２格は有標の格とみなされる。[4] 原則として必須の文成分である主語として用いられる１格、直接目的語として出現頻度の高い４格に対して間接目的語等として用いられる３格は出現頻度が比較的低い。２格は現代ドイツ語ではもっぱら名詞の付加語や前置詞等の目的語として用いられ、動詞の目的語、つまり文の基本的な構成要素として現れることは稀である。また、４格は werden を用いた受動文への言い換えで１格になるという点でも構造上の地位が高い。それぞれの格が担う意味役割にも違いがあり、１格や４格が幅広く様々な意味役割を担うのに対し、３格は受容者や経験者などに限られる。さらに、２格は歴史的な変遷の中で役割が縮小され、現代ドイツ語では主に書き言葉的な表現で用いられるなど、他の３つの格とは大きく異なる位置づけを必要とする。このように、現代ドイツ語の４つの格は異質なものの集まりであって、それが形態にも反映されているのである。

１格・４格が３格・２格と異なった形態上の特徴を示す例として、定冠詞と定冠詞類、定冠詞（類）と不定冠詞類の間の形態の違いを付け加えておきたい。例えば定冠詞類 dieser の中性１格・４格の形は dieses であり、これは付加語形容詞の強変化形などとも共通する汎用性の高い語形であるが、一方で定冠詞の中性１格・４格は das という特徴的な形を示す。また、定冠

詞や定冠詞類がすべての性・数・格においてこれらのカテゴリーを示す語形を持つのに対し、不定冠詞類は男性１格と中性１格・４格で語尾を欠く。このように不規則な要素を含む１格・４格に対し、３格・２格では語形の規則性が高い。

以上見てきたような現代ドイツ語における格の関係は、もちろんドイツ語教育の場でも重視される必要がある。実際的なドイツ語の運用の観点からも、例えば次のような１格と４格が用いられる例をまず学ぶことが望ましいと考えられる。

（1） Ich kaufe einen Hut. Ich trage den Hut. Der Hut gefällt mir gut.

このような例を用いた演習を通して、学習者はまず主要な格である１格と４格からなる「小さな体系」を習得することになる。次いで授与や伝達を表す３価動詞を用いて３格を導入することで、扱う文の構造とともに学習者が持つ「格の体系」が拡張される。また、名詞付加語としての２格を導入することで名詞句の構造が拡張され、さらに前置詞句の導入によってより多様な構造を持つ文が習得されることになる。このような段階を踏むことが、初学者に無理なく語形と文構造を学ばせるうえで必要であろう。(5) 一方で、男性・中性と女性・複数の間の形態の違いももちろん顧慮されるべきである。ドイツ語学習の最初期の段階で名詞句の語形変化と基本的な文構造を学ぶ際にはこのような面での配慮が必要であるが、付加語形容詞の語形変化を学ぶ際にも基本的に同様の方法を取ることが有効であると考えられる。

３．付加語形容詞の語形変化と指導法

３．１ 語尾選択の規則と指導法

付加語形容詞の語尾には次の表に示す強・弱の二種類がある。強語尾は指示代名詞 dieser の変化語尾と同じものであり、(6) 付加語形容詞の語形変化を学ぶ段階では既習事項に含まれる。弱語尾は付加語形容詞に特有のものである。

表２　付加語形容詞の語尾

強	男性	中性	女性	複数
１格	er	es	e	e
４格	en	es	e	e
３格	em	em	er	en
２格	–	–	er	er

弱	男性	中性	女性	複数
１格	e	e	e	en
４格	en	e	e	en
３格	en	en	en	en
２格	en	en	en	en

形容詞に付加される語尾は、名詞句の中に性・数・格を表示するものがほかに存在すれば弱語尾、そのようなものが存在しなければ強語尾という規則によって使い分けられる。初級の学習者に困難をもたらすのはこの語尾の使い分けである。たしかに、この規則は単純なものであり、語尾の一覧表を参照しつつ規則を適用して空欄に語尾を補うといった練習問題を解くことはそれほど難しくはないだろう。しかしながら、これらの語尾を確実に記憶し、会話の中で正しい語形で形容詞を用いることは、初級段階の多くの学習者にとって困難であることが予想される。仮に語形変化を機械的に記憶させ、系統立てられていない限定された数の練習問題に取り組ませても、とっさに正しい語形を用いる技術は身につかないであろう。(7) もちろん、学習者が長期間にわたる学習の中で随時規則を確認して適用する訓練を積めば、徐々に適切に語尾を用いることができるようになることも期待できよう。しかし、それではモチベーションの異なる個々の学習者の努力に結果を委ねることになるうえ、短期間で基礎的な運用力を身につけさせることは難しくなってしまう。以上のことから、形容詞の語形変化の基礎を定着させることができるような方策を検討する必要が生じる。

付加語形容詞の実際の使用においては、名詞句が定冠詞類を含む場合、不定冠詞類を含む場合、ならびに冠詞類を持たない場合がありうるが、これらのすべてについて、あらゆる性・数・格の語形を習得させようとするのは、学習時間や学習者の負担の面でも、教材の準備の面でも現実的ではない。以下では、すべてのパターンのうち演習により確実に定着させる部分と、規則の理解にとどめる部分を明確に区別したうえで演習を行う方法を検討したい。ここでは、確実な定着をはかる部分として定冠詞 der および不定冠詞 ein が付加された名詞句のみを取り上げる。ただし、不定冠詞は複数形の名詞には付加されないことから、複数名詞の場合は所有冠詞 mein で代替する。(8) これら以外のパターンについては、この段階では取り扱わないことを想定している。例えば、alle Jugendlichen という語句において名詞化された形容詞に弱語尾 -en がつくことを初級段階の学習者が理解し、自らこのような語句を形成できるように指導することは難しいと思われる。学習が進む中で語尾選択の規則を類推的に適用できるようになるための基礎を身につけることをこの段階での指導の目標としたい。

定冠詞や不定冠詞類を含む名詞句以外にも、学習者が確実に使えるようにするべき事項はもちろんある。例えば、次の（2）は形容詞が付加された無冠詞の複数名詞の、（3）は名詞化された形容詞の複数形（無冠詞）のそれぞれ１格・４格と３格の語形である。

（2） kleine Kinder / kleinen Kindern

（3） Deutsche / Deutschen

いずれも冠詞類を持たないので形容詞は強語尾を取ることになる。これらの語形は出現頻度も高く、比較的早い段階で学んでおく必要があるだろう。このようなケースについては、個別に取り上げて学習させることを提案したい。これらは例外的な変化ではなく、語尾の使い分けの規則に基づいて得られる形ではあるが、個々のケースを規則に位置づけて理解できるようになるのは、十分な量の個別的な事例を習得した後の段階であろう。機械的な記憶によって正しい語形が用いられるようになった後で法則性を再確認するという学び方にも意味があると考えられる。なお、確実な定着を図る部分と事後に習得させる部分を分ける明確な基準があるわけではもちろんないので、この点については絶えず見直すことを前提にしている。

以下では、付加語形容詞の語形変化の演習を次の方針のもとに行うことを想定し、具体的な指導法について検討したい。

（4） ① 定冠詞 der および不定冠詞 ein（複数名詞は所有冠詞 mein）が付加された名詞句を用いる。

② 男性と中性、女性と複数を組み合わせ、それぞれについて練習する。

③ まず１格・４格を定着させ、次いで４格との組み合わせで３格を学ぶ。４格と３格の練習には３・４格支配の前置詞を用いる。

ドイツ語の教材において、学習の最初期の段階で定冠詞や不定冠詞を用いて格の概念を導入する際には教える対象を１格と４格に限定し、次いで３格へ、さらに２格へと拡張するという配慮がなされていることはあるが、付加語形容詞を扱う際にも、語形を確実に習得させるために同様の段階を踏むことが適切であると思われる。また、すでに学んだ定冠詞・不定冠詞等の語形変化の知識を補強するうえでも、このような方法で学ぶことは有効であろう。なお、２格は本稿で考察する指導の対象からは除外する。以下で見るとおり２格の形態は種類がごく少ないので、語形変化のルールを理解していれば事後の習得は容易である。

定冠詞・定冠詞類や不定冠詞類の１格・４格が形態の面で３格・２格にない複雑さを持っていることは２で述べたが、付加語形容詞の語形変化についても同様のことがいえる。名詞句が不定冠詞類を含む場合、不定冠詞類が語尾を持たないために形容詞に強語尾が付加されるのは男性１格と中性１格・４格である。また、女性と複数で弱語尾が異なるのも１格・４格のみに

見られる現象である。学習者にとって複雑に感じられる１格・４格の語形変化を確実に定着させるという意味でも、まずこれらの格を重点的に取り上げることが有効である。特に、とりわけ複雑さの度合いが高い男性・中性の１格・４格を優先的に練習するなどの配慮が必要となる。以下では、まず名詞句の単位で基本的なものから順に語形を学び、次いでそれらの形が使用される文を用いて練習を行うことで、１格と４格からなる体系の中に学んだ語形を位置づけるという方法で語形変化の基礎を習得する方法について考察する。

３．２ 語形変化の導入（句の単位）

ここでは、名詞句の単位で語形変化を導入する方法について検討する。まず、定冠詞ならびに不定冠詞類と用いられた際の付加語形容詞の語尾について確認しておきたい。

表３　定冠詞と付加語形容詞の語尾の組み合わせ

<table>
<tr><td></td><td>男性</td><td>中性</td><td>女性</td><td>複数</td></tr>
<tr><td>１格</td><td>der -e</td><td rowspan="2">das -e</td><td rowspan="2">die -e</td><td rowspan="2">die -en</td></tr>
<tr><td>４格</td><td>den -en</td></tr>
<tr><td>３格</td><td colspan="2">dem -en</td><td>der -en</td><td>den -en</td></tr>
<tr><td>２格</td><td colspan="2">des -en</td><td colspan="2">der -en</td></tr>
</table>

表４　不定冠詞類と付加語形容詞の語尾の組み合わせ

<table>
<tr><td></td><td>男性</td><td>中性</td><td>女性</td><td>複数</td></tr>
<tr><td>１格</td><td>ein ϕ -er</td><td rowspan="2">ein ϕ -es</td><td rowspan="2">eine -e</td><td rowspan="2">meine -en</td></tr>
<tr><td>４格</td><td>einen -en</td></tr>
<tr><td>３格</td><td colspan="2">einem -en</td><td>einer -en</td><td>meinen -en</td></tr>
<tr><td>２格</td><td colspan="2">eines -en</td><td>einer -en</td><td>meiner -en</td></tr>
</table>

定冠詞が付されている場合、形容詞は必ず弱語尾を取る。不定冠詞類の場合も基本的に形容詞は弱語尾を取るが、不定冠詞類の語尾が欠落する男性１格と中性１格・４格のみ強語尾を取る。

ここで、弱語尾の機能について考えておきたい。弱語尾には -e と -en の二種類しかなく、これらの語尾はドイツ語の語形変化システムの中で最も特殊性の低い語尾であるとされる。(9) しかも、-e の形になるのは単数１格・４格のみ（男性４格を除く）で変化に乏しい。しかしながら、この弱語尾に形容詞が名詞の付加語であることを示す機能しか認めないのであれば二種類の形態を持つことが説明できない。この -e と -en の区別がドイツ語史において長期間にわたって維持されていることからも、これらが特定の機能を担っていると考えるのが妥当であろう。(10)

弱語尾 -e と -en の区別が名詞句の性・数・格を区別するうえで機能しているという事実はしばしば指摘されているが、(11) とりわけ名詞化された形容詞など、名詞本体が欠けている場合にその役割が明確になる。(12) 例えば、女性１格・４格と複数１格・４格の弱語尾はそれぞれ -e、-en となり、両者は区別される。女性名詞では名詞本体の語形によって必ず複数形が単数形から

区別されるため、句の中に名詞が存在する場合には弱語尾によるこの区別は余剰的なものである。しかし、名詞化形容詞などの場合には、次のように弱語尾によってのみ女性と複数が区別される。

（5） die Deutsche / die Deutschen

女性１格・４格と複数１格・４格の弱語尾の区別は紛らわしいため特に注意が必要な事項であるが、弱語尾が持つ機能の面からも重要性を持つといえる。

付加語形容詞の語尾を導入する際に、まず定冠詞付きの場合を出発点とするなら、ここでは弱語尾の配分のみが問題となる。有標の３格・２格の弱語尾はすべて -en であり習得は容易であることから、無標の１格・４格に重点を置くことになる。単数１格・４格の弱語尾は男性４格のみが -en となり、他はすべて -e である。男性が１格と４格で異なる形態を持つことはドイツ語学習の最初期の段階で定冠詞を習う際にすでに学んでいる事実だが、ここであらためて注意を促すことになる。先に述べた女性１格・４格と複数１格・４格への弱語尾の配分については、数に関して無標の単数が -e、有標の複数が -en となるということで説明できる。女性と複数の形態が異なるのはここで初めて出てくる事柄であることに加え、性・数・格の表示は主に冠詞類が担い形容詞は補助的な役割を果たすという全体的な原則に合致しないことからも、この区別には特に注意する必要がある。以上のことから、定冠詞付きの１格・４格については、弱語尾が -e となる形、つまり以下のような男性１格と中性・女性の１格・４格を出発点とし、語尾が -en となる形に特に注意を向けるという方法を取ることが合理的である。[13]

（6） der groß<u>e</u> Baum / das groß<u>e</u> Haus / die klein<u>e</u> Vase

もっとも基本的といえるこのような例で、付加語形容詞には原則として語尾を付けねばならないことを認識させるとともに、まずは弱語尾 -e を確実に定着させる必要がある。複雑に見える語形変化であっても、基本的な部分を取り出すと単純で覚えやすいものであると理解することは、学習を容易にするだけでなく、文法の仕組みを理解するうえでも意味のあることであろう。次に必要となるのは、男性の１格から４格への拡張である。

（7） der groß<u>e</u> Baum → den groß<u>en</u> Baum

先に述べたとおり、男性のみが１格と４格で形態が異なることを、ここであらためて確認することになる。次は女性１格・４格から複数１格・４格への拡張である。

（8） die kleine Vase → die kleinen Vasen

冠詞類が明示しない数の区別を付加語形容詞が担う事例を、このような対の形で重点的に記憶させることができる。複数になると性の区別がなくなることから、同一の名詞を用いて女性と複数の対応関係を意識させる方法は適切でないという見方もあるかもしれないが、女性と複数の弱語尾の区別を習得するには、まずこのようなパターンを確実に記憶することが有効であると思われる。

次に、定冠詞から不定冠詞類に拡張する際には、当然ながら不定冠詞類に語尾がつかない男性１格、中性１格・４格を特に強調することになる。不定冠詞が語尾を欠く男性１格と中性１格・４格に強語尾が入り込むという現象は、冠詞類によってなされない区別が形容詞の語尾によって担われるという点で、弱語尾によって女性と複数が区別される現象と共通のものである。一方、不定冠詞付きの男性４格は定冠詞付きの場合と形容詞の語形に違いがなく、習得は容易である。

（9） der große Baum → ein ϕ großer Baum
（10） das große Haus → ein ϕ großes Haus
（11） den großen Baum → einen großen Baum

女性・複数の場合は定冠詞が付された場合と不定冠詞類が付された場合で語尾に違いがないので、定冠詞から不定冠詞類への拡張に際して支障はないだろう。

（12） die kleine Vase → eine kleine Vase
（13） die kleinen Vasen → meine kleinen Vasen

これで、定冠詞と不定冠詞類が付された１格・４格の名詞句の付加語形容詞の語形について、ひと通り学んだことになる。

３．３ 語形変化の導入（文の単位）

ここでは、３．２ で示した順に学んだ形容詞の語形を文の形で系統立てて練習する方法について考える。３．２ では「定冠詞＋形容詞＋名詞」という形の男性・中性・女性１格を出発点とし、そこから定冠詞付き・不定冠詞類付きの名詞句１格・４格全体に拡張するという方法を取ったが、ここではこれを「１格・４格からなる小さな体系」としてあらためて整理することも意図している。練習の仕方としては、次のような用例を提示し、口頭での練習等によってパターンを記憶する方法を想定している（まず男性・中性の例を挙げる）。

表５　冠詞類＋付加語形容詞＋名詞（男性・中性）

		定冠詞	不定冠詞
男性	１格	Da steht der große Baum.	Da steht ein ϕ großer Baum.
	４格	Ich sehe den großen Baum.	Ich sehe einen großen Baum.
中性	１格	Da steht das große Haus.	Da steht ein ϕ großes Haus.
	４格	Ich sehe das große Haus.	Ich sehe ein ϕ großes Haus.

この表は、定冠詞を持つ場合と不定冠詞を持つ場合を左右で対応させ、１格と４格を上下で対応させる形でまとめている。男性の場合、３．２ で示したのと同様に定冠詞の付された１格の形を出発点として、定冠詞付き１格から４格へ、定冠詞付き１格から不定冠詞付き１格へ、定冠詞付き４格から不定冠詞付き４格へという流れで語形変化を把握できる。中性の場合には１格と４格で形態が一致するが、むしろ異なる格で形態が一致する場合を学習者に強く意識させるためにもこのような練習は必要であるといえる。このような短いパターンを確実に記憶することで、定冠詞と不定冠詞類、１格と４格の交代に伴う語形変化を、いわば「小さな体系」としてイメージできるようになることは、実際にドイツ語を運用する能力を身につけるうえでも有益であろう。(14)

ここで、新たに３格名詞句に含まれる形容詞の語形を導入する方法について簡単に述べておきたい。３格への拡張に際しては、３・４格支配の前置詞を用いることが一つの手段として考えられる。４格の語形はすでに表５で学んでおり、ここから拡張する形で３格の形を学ぶことができる。また、同一の性・数の冠詞類について３格と４格の形態が一致することはないという事実はすでに学んでいるはずであるが、１格・４格に対置される有標の格としての３格の位置づけと機能をここであらためて確認することができる。一方で、冠詞類を持つ３格の名詞句に含まれる形容詞の語尾は必ず -en になるので習得は容易である。

(14) Er stellt sich unter den großen Baum / unter einen großen Baum.

(15) Er steht unter dem großen Baum / unter einem großen Baum.

(16) Er stellt sich vor das große Haus / vor ein großes Haus.

(17) Er steht vor dem großen Haus / vor einem großen Haus.

１格・４格で複数の形態を示す男性・中性名詞句が３格で形態の一致を示し、かつそれが３格に特有の形であることは既習事項だが、ここであらためて確認する価値のある事実だといえるだろう。

女性・複数については、名詞句が定冠詞を持つ場合と不定冠詞類を持つ場合で付加語形容詞の語尾が変わらないので、その点では習得が容易である。一方で、先に述べたとおり１格・４格について女性と複数の形態を区別するのは付加語形容詞の弱語尾のみであることから、学習者はこの点を重点的に学ぶ必要があるが、以下のように示すことでこの女性と複数の違いを見やすくすることができる。

表６　冠詞類＋付加語形容詞＋名詞（女性・複数）

		定冠詞	不定冠詞類
女性	１格	Da steht die kleine Vase.	Da steht eine kleine Vase.
	４格	Ich sehe die kleine Vase.	Ich sehe eine kleine Vase.
複数	１格	Da stehen die kleinen Vasen.	Da stehen meine kleinen Vasen.
	４格	Ich sehe die kleinen Vasen.	Ich sehe meine kleinen Vasen.

３格の語形については、男性・中性の場合と同様に３・４格支配の前置詞を用いて４格と対比する形で学ぶための例を挙げておきたい。

(18) Ich stelle die Blumen in die kleine Vase / in eine kleine Vase.

(19) Die Blumen stehen in der kleinen Vase / in einer kleinen Vase.

(20) Ich stelle die Blumen in die kleinen Vasen / in meine kleinen Vasen.

(21) Die Blumen stehen in den kleinen Vasen / in meinen kleinen Vasen.

３格の弱語尾が必ず -en であることに加えて複数３格の冠詞類の形にもあらためて注意を促す必要があるが、このような形で既習事項の知識を補強するとともに新たな知識を加えていく

という手法を明確にすることによって、学習者が学びを進めるうえでの困難が緩和されるものと考えられる。以上で、２格を除き、定冠詞と不定冠詞類が付された名詞句における形容詞の語形変化をひと通り学んだことになる。

４．おわりに

本稿では、付加語形容詞の語形変化を指導する際に、語尾選択の規則を解説して練習問題を解かせるだけでなく、主要と思われるパターンを特に重点的に定着させる方策について検討してきた。その際、「定冠詞＋形容詞＋名詞」と「不定冠詞類＋形容詞＋名詞」の１格・４格・３格に対象を限定し、「定冠詞＋形容詞＋単数名詞」の１格を出発点としてこれを拡張していくという手順を採用した。また、まず名詞句の形で語形変化を学び、次に文の形で学んだ語形を適用しつつ、あらためて体系的に整理するという方法で、学習者に語形変化の体系を段階的に習得させる方法について考察してきた。

付加語形容詞を含む名詞句を強変化・弱変化・混合変化の３つのパターンにまとめた表を示すことは、学習者にとって個別の事例について確認するうえで便利ではあるが、この表を用いて重要なパターンを自ら身につけることは困難であろう。他方、形容詞の強語尾と弱語尾のみを取り出した表を提示して語尾選択の規則を解説し、系統立てられていない練習問題をいくつか解かせても、それだけでは十分な効果は期待できない。最終的には自ら規則を適用して正しい語形を選択できるようにすることが目標であるが、そのためには理論的な解説と実際の運用の間の橋渡しとなるような練習の素材を与えることが求められる。また、これは短期間で基礎的な運用力を身につけさせ、学習のモチベーションを維持するために必要なことである一方で、ドイツ語の語形変化の体系を実感として理解することにもつながるだろう。

本稿で考察してきたような、理論的な解説と実践的な運用の間の橋渡しの必要性は、初級外国語の指導全般についていえるのではないだろうか。指導法の開発に際しては、限られた時間の中で取り扱う事項の選択、定着させるべき基本的なパターンの設定、基礎から応用までの練習問題の体系化など、様々な点について検討する余地があると思われる。

最後に、学習者のドイツ語に対する理解を深めるための教育という観点から述べておきたい。ドイツ語教育の場でなされる説明が、通時的な観点から見ると必ずしも適切でない場合がある。例えば、形容詞の弱語尾は元来「限定」を表す機能を持っていたために定冠詞と結びつくようになったとされ、この観点からすれば、定冠詞が付される場合に形容詞が弱語尾を取るという説明は、歴史的事実に合致しない便宜的なものであるように思われる。[15] しかしながら、共時

的な観点から見ればこのような説明は妥当なものであり、学習者がまず現代ドイツ語の仕組みを学ぶ上では必要なものである。通時的な言語の変遷を知ることによって学んだ知識を相対化し、時代とともに変化しうるものとして言語を理解するのは、より先に進んだ段階でのことであろう。初級段階の学習者に対する指導法は、その出発点として位置づけられるべきものである。

注

(1) 片岡（2019）を参照。

(2) 現代ドイツ語では複数形において性の区別がなくなることから、本稿では単数形のそれぞれの性を「男性」、「中性」、「女性」、複数形を「複数」と表記する。

(3) 男性と中性を「非女性」としてまとめるとらえ方についてはThieroff / Vogel（[2]2012, p.56）、Wiese（2000, p.141）を参照。

(4) Eisenberg（[4]2013, p.166）、Thieroff / Vogel（[2]2012, pp.56-57）を参照。

(5) Granzow-Emden（[2]2014, p.270）は、ドイツ語の自然な獲得においても序列の順に格が習得されることに言及している。

(6) 男性・中性２格では名詞本体の語尾 -(e)sによって格が示されるため、付加語形容詞が強語尾を取ることはない。

(7) ドイツ語教材における形容詞語形変化の扱い方の問題についてはSchmid（2016, p.8）を参照。

(8) 所有冠詞等の不定冠詞類が単数形において示す変化は不定冠詞と全く同じである。以下では不定冠詞と不定冠詞類をまとめて「不定冠詞類」と呼ぶことにする。

(9) Eisenberg（[4]2013, p.174）を参照。

(10) 行重（2014, p.68）を参照。

(11) 例えばDuden（[9]2016, p.954）。

(12) Thieroff / Vogel（[2]2012, pp.58-59）、Wiese（2000, pp.142-143）を参照。

(13) Gallmann（1990, p.283）は弱変化形容詞について、格・数のいずれもが有標でない場合には -eが、そうでない場合（すなわち、格・数のいずれかもしくは両方が有標である場合）には -enが付加されるとしている。

(14) Wegener（1995, pp.173-177）は、冠詞類や代名詞の語形変化の体系を学習者が習得する際の順序を提案している。定冠詞と不定冠詞類の１格・４格からなる「小さな体系」の習

得は、このような学習プロセスの一部を取り出したものとして位置づけられるだろう。

（15） 齋藤（2012, p.34）を参照。

参考文献

Duden（[9]2016）. *Die Grammatik*. Mannheim/Wien/Zürich: Dudenverlag.

Eisenberg, P.（[4]2013）. *Grundriss der deutschen Grammatik. Bd. 1. Das* Wort. Stuttgart/Weimar: Metzler.

Gallmann, P.（1990）. *Kategoriell komplexe Wortformen: das Zusammenwirken von Morphologie und Syntax bei der Flexion von Nomen und Adjektiv*. Tübingen: Niemeyer.

Granzow-Emden, M.（[2]2014）. *Deutsche Grammatik verstehen und unterrichten*. Tübingen: Narr.

片岡宜行（2019）「ドイツ語付加語形容詞の語形変化―教育法の観点から―」『福岡大学教育開発支援機構紀要』１，97-106

齋藤治之（2012）「ドイツ語における形容詞の弱変化と強変化の起源」『ドイツ文學研究』57, 25-39

Schmid, D.（2016）. Die deutschen Adjektive ― ihre Verwendungsweise, ihre Flexion und die Frage: Wann benützt man welche Deklinationsart?『外国語教育論集』38, 1-16

Thieroff, R. & Vogel, P. M.（[2]2012）. *Flexion*. 2., aktualisierte Auflage. Heidelberg: Winter.

Wegener, H.（1995）. *Die Nominalflexion des Deutschen ― verstanden als Lerngegenstand*. Tübingen: Niemeyer.

Wiese, B.（2000）. Warum Flexionsklassen? Über die deutsche Substantivdeklination. In R. Thieroff *et al*.（Eds.）, *Deutsche Grammatik in Theorie und Praxis*（pp.139-153）. Tübingen: Niemeyer.

行重耕平（2014）「ドイツ語における形容詞の弱変化語尾“-e/-en”及び指示／関係代名詞の拡張語尾“-en”について―その意味するもの」『島根大学外国語教育センタージャーナル』9, 67-81